

編集後記

一回目の緊急事態宣言が発出されて 1 年以上が過ぎた。その後も、全都道府県が対象ではないものの再度緊急事態宣言が発出されることになり、三度目の宣言は今回の会報が公開された時にまだ解除されていない。

ヒトの命と健康を脅かす世界的な感染症の発生する可能性はつとに取り沙汰されていたけれども、事前にその対策を準備することができなかつた。感染急拡大の後、医学界を中心とした集中的な研究によって新型コロナウイルスの実態の解明が進んでいる。解決のためのあらゆる手掛かりを探り、様々な対策に取り組んでいるが、しかしウイルスとの戦いは終わりがまだ見えていない。

一方、感染が拡大し始めた当初から、食料供給システムが混乱する可能性が心配された。この一年超の間に、コロナ禍が紛争や経済危機と結びついて途上国では栄養不足人口が再び増えており、先進国でも社会的弱者が食べ物を手に入れることに大変な苦勞をしている。また私たちも日常生活においてこれまでのようなスタイルではレストランでの食事をとれなくなってしまう。ただ、全世界的には深刻な食料不足は回避することができ、食料供給システムはロバストネス（頑健性）とレジリエンス（復元力）を持つことが明らかになった。このように多くの地域で食料の安定的な供給が維持されたのは、感染が拡大する最中にも、農林水産業・食料産業において生産、加工、流通、販売にたずさわってきた（エッセンシャルワーカーと呼ばれることもある）多くの人々の尽力があったからであるが、それに加えて、これまで発展し普及してきた農学面を中心とした科学技術がその活動を根幹で支えてきたことも指摘しておくべきだろう。

本号は 2020 年 11 月の日本農学アカデミー・農学会共同主催、オンラインシンポジウムで発表された論考をとりまとめたものである。シンポジウムでは、ヒト以外の生物におけるウイルスの感染が農林水産業の食料生産活動を大きく制限する恐れがあり、そのことからヒトの生存にとって潜在的な脅威となっていること、そのリスクを制御するために科学的な対策が検討されていること、それとあわせて、逆にウイルスを人類のために活かす可能性のあることが紹介された。

今回の危機を克服しても、その後に再び別のウイルス感染症の起こることが懸念されているが、それだけでなくヒト以外の生物にウイルスが襲い掛かる可能性にも目を向けなければならない。本来起こって欲しくないことではあるが、もしもの事態に備える必要があり、農学がこの分野における地道な取り組みを通して、人類社会を支える大きな貢献を果たしていることが、シンポジウムから認識されたであろう。本号の論考を通じて、シンポジウムに参加できなかった方々にもご確認いただければ幸いである。（中嶋 康博）